

『間違いの喜劇』におけるレヴァント貿易とイングランド人の自己成型

三原里美

はじめに

商業的要素に満ちたシェイクスピアの『間違いの喜劇』の舞台は、これまで同時代ロンドンの商業世界と比較されてきた。その一方で、劇の舞台となる地中海東部地域の商取引、とりわけ初期近代のレヴァント貿易を軸とする作品解釈はいまだ十分にされていない。しかし本作品にはレヴァント貿易の主要な商品への言及が多々見られる。また、劇の冒頭でエフェソスとシラクサの商業的關係が示されるだけでなく、ペルシャへ向かう商人も現れる点で、地中海東部の経済的ネットワークが垣間見える。本論では、初期近代におけるレヴァント貿易を通じた輸入品がイングランド人の自己像の形成に与えた影響を手掛かりとすることで、イングランドに流入する地中海文化に対する不安を描いた物語として、双子の取り違えの物語を再考したい。

1. レヴァント貿易商品の流入

地中海東部の町エフェソスを舞台にした『間違いの喜劇』においては、レヴァント貿易の主要な輸入品であった品々が繰り返し登場する。エフェソスのアンティフォラスの家にはトルコのタペストリーが掛かった机があり、人違いをされたシラクサのアンティフォラスは仕立て屋にシルクを勧められ、シラクサのドロミオはエフェソスから逃げ出そうとする際にオリーブオイルを船に載せる。これらの品々は、リチャード・ハクルート (Richard Hakluyt) の *The Principal Navigations* (1589) におけるレヴァント貿易に関する記述の中で言及される輸入品と一致する。レヴァント貿易は 1580 年代から 1620 年代頃にかけて繁栄したが、イングランドにおける地中海商品の需要は、富と権力を誇示することへの欲望からきていたと考えられる。*The Description of England* (1577) の中で、ウィリアム・ハリソン (William Harrison) はトルコやペルシャの織物で室内を飾る習慣が広まったことにより自国の富が明らかになったと述べている。イングランドの家庭に普及した地中海貿易の商品は、イングランドの豊かさの証明となっていたのだ。

『間違いの喜劇』において繰り返される物質的交換は双子の取り違えによりことごとく失敗するが、この間違った交換は結果として家庭と地中海貿易とを結びつけている。アンティフォラス (S) は商人から金を受け取り、それをすぐにドロミオ (S) に預けるが、代わりにエフェソスのドロミオが現れ、妻が家で帰りを待っているという伝言を持って来る。商人の手から渡った金が家庭にまつわる伝言と交換されてしまう様は、地中海の経済圏と家庭との間を行き来する金品の流動性を暗示している。また、アンティフォラス (E) がエイドリアーナのために買った首飾りは金と交換され、金細工師がその金をペルシャへ向かう商人の手に渡すことになっている。家庭内で受け渡される贈り物はエフェソス内で商品として取り引きされるだけでなく、より大きな地中海の経済圏へと循環するのだ。さらに、アンティフォラス (E) は妻への懲罰に使用する縄をドロミオ (E) に買いに行かせるが、代わりにドロミオ (S) がエフェソスを発つための船を用意して現れる。夫婦の間で用いられるはずだった縄が、レヴァント貿易の商品であるオリーブオイルを積載して地中海に乗り出そうとする船とすり替わっているのだ。

『間違いの喜劇』の商業世界において、家庭の品々と地中海貿易の金品とが容易に交換される様は、地中海東部の商品が初期近代イングランドの家庭に流入していた点と関係する。エフェソスを舞台とするこの劇の「家」はイングランドをも表象しているからだ。ドロミオ (E) は主人の家を「フェニックス屋敷」と呼ぶが、これはロンドンに実在した店の名前であり、その上この家にはイングランドの室内装飾を想起させるトルコのタペストリーがある。またこの劇において“home”という語は「家庭」と「母国」という二重の意味を持つ。イジーオンは自らの旅路について、“coasting homeward, came to Ephesus” (1.1.134) と語るが、この一文が家族の探求についての語りとその旅の地理的説明の中に埋め込まれているという点で、ここでの“home”は彼の家と母国の両方を指すと考えられる。したがって本作品を通して描かれる、家庭という“home”と地中海の経済圏とを行き来する商品の流動性は、イングランドという“home”に侵食する地中海東部文化の影響を示唆していると言えるだろう。

2. 物質文化とイングランド人の自己成型

イングランドに流入するレヴァント貿易商品という表象が、『間違いの喜劇』において双子の取り違えの物語を通して描かれるのは、初期近代において地中海東部の品々がイングランド人の自己像を構築するのに貢献していた点と関わっている。オスマン帝国の豊かさや覇権に対し賞賛の眼差しを向けていたイングランド人に

とって、トルコの商品を室内装飾に取り入れることは自身の社会的優位性を表明するのに役立っていた。オスマン帝国の商品を所有し、その富と権力を模倣することは、イングランド人の自己成型の手段となっていたのだ。だがその一方で、地中海東部の贅沢品によってイングランド人の道徳心が変化することを危惧する作家たちもいた。ジョージ・チャップマン (George Chapman) の *An Humorous Day's Mirth* (1597) およびジョン・マーston (John Marston) の *Histrion-Mastix* (1610) において、トルコの煌びやかなファッションに影響を受ける人々の尊大さを “Turkish pride”、トルコの文化をまねるイングランドを “the land of apes” と呼ぶパターンが見られる。人々の内面的腐敗を揶揄する作家たちは、イングランド人のあるべき姿がトルコの商品によって変容することに対し危機感を抱いていたと言える。

同時代の物質文化に呼応して、『間違いの喜劇』は人と金もしくは贅沢品との交換可能性を強調している。ドローミオ (E) が「マルク」と「痣 (marks)」をかけた洒落を飛ばし、金と人間の身体とを故意に混同させるだけでなく、劇冒頭ではエフェソスの商人たちの命が金銭によってのみ買戻すことができると語られる。さらに、この劇では夫婦の関係が装飾品によって表されており、首飾りと指輪の所有者が娼婦に取って代わられる過程を通して夫婦関係の危機が描出される。人間と物質とのアナロジーを通して、『間違いの喜劇』はいかに地中海の市場における贅沢品がその所有者自身の性質を表しているかを明らかにしている。そのために、登場人物は商品が届いた先の人物と容易に入れ替わってしまうのだ。

3. 双子の交換に見られる Englishness 変容の危機

『間違いの喜劇』における物質的交換による異邦人と地元住民との混同は、地中海東部の商品がそれを所有する人をも変容させることに対する同時代の不安を反映している。トルコの衣服を着るイングランド人について “living like strangers when they be at home” (sig. D2^v) と述べるチャップマンの主張は、『間違いの喜劇』で現実のものとなっている。アンティフォラス (S) はエイドリアーナの本当の夫の代わりに彼女と夕食を共にすることになり、異邦人がその家の住人であるかのようにエイドリアーナの家へ侵入する状況となっている。一方で、アンティフォラス (E) は自身の所有する家から閉め出され、家を失うと同時に自分の妻に認知されなくなる。イングランドの家を表象するアンティフォラス (E) の家が、“stranger” であるアンティフォラス (S) に奪われることは、外国から来たものがイングランドの家庭に侵食する様を描くだけでなく、それと同時に家の所有者自身も変容してしまう危機を暗示している。

家の主人が “stranger” へと変わってしまう様子は、エイドリアーナが夫と間違えているアンティフォラス (S) と対面する場面で描かれる。エイドリアーナは夫の態度がよそよそしいと主張する際に “Ay, ay, Antipholus, look strange and frown” (2.2.110) と述べるが、これに対しアンティフォラス (S) は “strange” を異邦人としての意味へと変換させ、“In Ephesus I am but two hours old, / As strange unto your town as to your talk” (2.2.148-49) と話す。アンティフォラス (E) はエイドリアーナの夫、すなわちこの家の主人であることを否定すると同時に、この町の住人であることも否定している。エイドリアーナの家は異邦人が住む外国の世界へと変わってしまったのだ。したがって、劇中で繰り返されるレヴァント貿易商品の循環に加えて、家に侵入する異邦人のストーリーは、チャップマンが述べていたように、“strange” なものがイングランドに流入することで、そこに住むイングランド人自身もまた異邦人へと変容してしまう恐怖を描いている。

参考文献

Chapman, George. *An Humorous Day's Mirth*. Malone Society, 1938.

Hakluyt, Richard. *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation*. George Bishop, Ralph Newberie, and Robert Barker, 1599.

Harrison, William. *The Description of England*, edited by Georges Edelen, Cornell UP, 1968.

Marston, John. *Histrion-mastix: Or, the Player Whipt*. George Eld, 1610.

Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*, 2nd edition, edited by G. Blakemore Evans and J. J. M. Tobin, Houghton Mifflin, 1997.